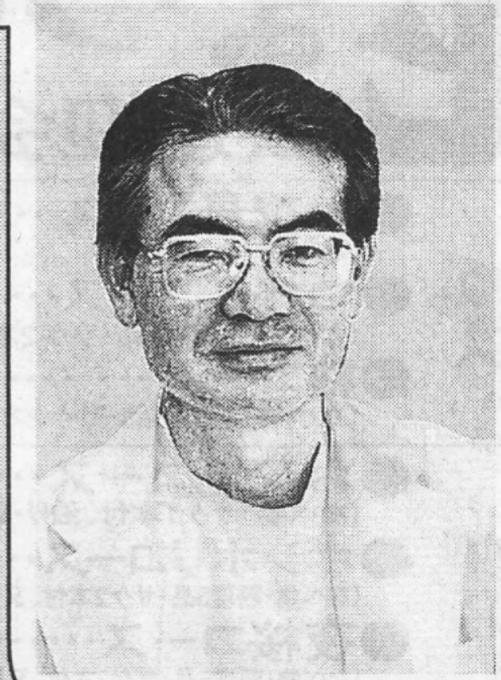


## 大震災が起きた中米エルサルバドルで医療活動をした



比屋根 勉さん

# ひと

## 職場の理解が派遣の実現につながった。

を診察した。

受け持ったのはエルサルバドルで二番目に被害が大きかったウスルタン県。粉じんや土ぼこりによる呼吸器障害が多く、栄養不良の子どもも多数診た。

「マラリアやコレラなどの感染症がなかったのが不幸中の幸い。それでもPTSD（心的外傷後ストレス障害）による不眠、不安感を訴える患者が多かったのが気掛かりだった」

勤務医であるため派遣は短期間に限られたが「援助に出向きたいと思っても職場の事情で行けない医師が多いのが実情。職場の理解が派遣の実現につながった」と打ち明ける。

阪神大震災でも現地行きを希望した

が、以前勤めていた病院では「経営や患者に与える影響が大きい」と異論が出たため断念。医師を送り出す病院にとって負担の大きい人道援助の難しさを思い知らされた。

エルサルバドルから帰国後すぐにインドで大震災が発生。「規模からして今回は一層の援助が必要。さまざまな立場を超え、十分な医療スタッフを投入する努力が必要だ」と訴える。

海外で活動することが幼少のころの夢で、かつてはジャーナリスト志望。妻と大学二年の長男、中学一年の長女と四人暮らし。沖縄県出身。五十二歳。

医師になったのは四十歳の時。琉球大卒業後に地方公務員を七年勤めたが「生きがい、やりがいを求めたい」と一転、医療の世界に飛び込んだ。

医者としてだけでなく人間としてできることをやりたかった」

一月中旬に発生した中米エルサルバドルの大震災後、自らアジア医師連絡協議会（AMDA、本部岡山市）に現地入りを申し出て、約三百人の被災者

「随分遠回りして医者になったが、